

武蔵野日曜集会

キリストの恩恵、賜物

――ロマ書第5章12～21節――

1996年4月21日(武蔵野)

小池辰雄

自己本位が罪 神・キリストと霊が交わっている世界 天下一品 キリストは無限 十字架と聖霊 あるべき現実を現在的に 永遠の生命 しょうがない世界のひと

【ロマ5・12～21】

¹²それ一人の人によりて罪は世に入り、また罪によりて死は世に入り、^{すべ}ての人、罪を犯しし故に死は凡ての人に及べり。¹³律法のきたる前にも罪は世にありき、然れど律法なくば罪は認めらるること無し。¹⁴然るにアダムよりモーセに至るまで、アダム^{とが}の咎と等しき罪を犯さぬ者の上にも死は王たりき。アダムは来^{きた}らんとする者の型なり。¹⁵然れど恩恵^{めぐみ}の賜物は、かの咎^{たまもの}の如きにあらず、一人の咎によりて多くの人の死にたらんには、^{まし}況て神の恩恵と一人の人イエス・キリストによる恩恵の賜物とは、多くの人に溢れざらんや。¹⁶又この賜物は罪を犯しし一人により来れるものの如きにあらず、^{さばき}審判は一人よりして罪を定むるに至りしが、恩恵の賜物は多くの咎よりして義と^さするに至るなり。¹⁷もし一人の咎のために一人によりて死は王となりたらんには、^{まし}況て恩恵と義の賜物とを豊かに受くる者は一人のイエス・キリストにより^{いのち}生命に在りて王たらざらんや。¹⁸されば一つの咎によりて罪を定むることの凡ての人に及びしごとく、一つの正しき^{おこなひ}行為によりて義とせられ、生命を得るに至ることも凡ての人に及べり。¹⁹それは一人の不従順によりて多くの人の罪人^{つみびと}とせられし如く、一人の従順によりて多くの人、義人とせらるるなり。²⁰律法の来^{きた}りしは咎の増さんためなり。然れど罪の増すところには恩恵もいや増せり。²¹これ罪の死によりて王たりし如く、恩恵も義によりて王となり、我らの主イエス・キリストに由りて^{とこしえ}永遠の生命に至らん為なり。

●自己本位が罪

¹²それ一人の人によりて罪は世に入り、また罪によりて死は世に入り、^{すべ}ての人、罪を犯しし故に死は凡ての人に及べり。¹³律法のきたる前にも罪は世にありき、然れど律法なくば罪は認めらるること無し。¹⁴然るにアダムよ



りモーセに至るまで、アダムの咎^{とが}と等しき罪を犯さぬ者の上にも死は王たりき。アダムは来らんとする者の型なり。

「王」というのは、「支配する」という意味です。「死が支配する」ということ。

¹⁵然^されど恩恵^{めぐみ}の賜物^{たまもの}は、かの咎^{とが}の如きにあらず、一人の咎^{とが}によりて多くの人の死にたらんには、況^{まさ}て神の恩恵と一人の人イエス・キリストによる恩恵の賜物とは、多くの人に溢れざらんや。

正に、パウロ的な論の進め方ですね。これが聖書歴史観、あるいは聖書神観とでもいうものです。「二人の人」というのはアダムのこと——もちろんイブも入ってるんですが、イブが蛇に誘われて云々という神話もあるようなわけですが——とにかく、アダム・イブでもって罪は世に入った。「罪」というのは、神さまの御意^{みこころ}を行わないことが罪の姿なんです。「この悪い思い、この悪い行為」ではない。罪というのは神の御意に従わないことです。これが罪の罪たることです。アダム・イブは神の御意に従わないでサタンの誘惑にあった。そういうことが「罪」です。とにかく、神に背いていること、神に従わないこと、これを罪という。人間の悪い行いとか悪い思いとかいうことではない。ですから、「罪びと」という一般的な言い方になると、神さまを受けとらないで、信じないで、勝手なことをしていることが、自己本位が「罪」なんです。神本位が「義」なんです。「義」というのは、正しいという意味ではない。神さま本位で、「神の意志に従っている」ことが「義」です。だから、一般の人が考えるような義ではない。不義というのは、神に従わないことです。聖書の「義」という言葉は、そういう縦の関係を非常に大事にしている。

「敬天愛人」

と西郷隆盛が言いました。あの「敬天」が「天」という霊的な存在に対することの従順な在り方が義なんです。そうでなくて、自分勝手であることが、どんなにそれが良さそうであつても、これが罪なんです。「罪」というのは一般的な概念よりもつと深い。

「罪びと」というのは、神さまを受けとらないで「神に従わない」ことを「罪びと」という。自己本位が罪です。自己本位の在り方が、どんなにそれが良さそうであつても、また、相対的な意味で良くても、それは本当の「義」ではない。だから、聖書でいうところの「義」という言葉はいわゆる正義ではない。神意に従うことが義で、従わないことが罪です。そういう縦の関係です。生まれつきの我々は、神を知らないのがみなこれは罪なんです、自己本位だから。敬天愛人ではないから。西郷さんは素晴らしいことを言ったと思う。あの敬天愛人という言葉は素晴らしいですね。

「己を愛するのはだめだ」

というのも、西郷さんの言葉です。

「どうぞ、御自愛ください」

なんてよく言うね、あれは本当はだめなんだ。己を棄ててかからないとね。キリストは決



して御自愛のひとではない。己を棄ててかかっている。そして、神さまの意志にこれ従う。これが義なんです。だから、「義人」というのは、神さまの意志に従って動いている人が義人です。あの「義」という言葉は正義ではない。神さまの意志に従うためには、神の霊、聖霊をいただいていると、本当はできない。どうしても自己本位になってしまう。

我々は聖霊をいただいていると、これは霊気をもっている。我々が持っているのはこの霊気です。大体、本当は物質という言葉がおかしいんだ。宇宙のものはみな、ある一つ不思議な存在でね、いわゆる常識的な物質ではないんです。自然界をみても実に不思議な生命が動いている。生命的なものです。

●神・キリストと霊が交わっている世界

本当のことは、水を割らないで言うとは、人間の魂はそれに応える。それに応えることのできないような魂だったら、もう問題にならない。いわゆる信仰があるかないかではない。「しんこう」というのは、私はいわゆる「信仰」とは書かない。キリストを信じ仰いでいたってしょうがない。キリストと一つにならなければ。だから、私は「神交」と書く。神・キリストと霊が交わっている世界です。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

とパウロが言った、あれが神交なんです。信じ仰いでなんかいない。いわゆる信仰なんてものは、信じ仰いでいるのではだめなんだ。私は

「信仰なんかありません。私は信じ仰いでいるのではなくて、神と交わっています」

と言う。パウロもヨハネもそうなんです。神さまとの霊的な交わりの中で、力が来てしょうがない。生命が来てしょうがない。光が来てしょうがない。そういうしょうがない世界です。「こっち側から信じている」なんていうのではない。自分を投げ入れる、キリストの中に投身する。そうすると、こんな楽なことはいし、こんなありがたいことはいし、こんな力強いことはいし。

だから、何も恐いことはいし。キリストさまだから。キリストの中に入っているんだから。どんな事態に対してもへこたれない。「だめだ」ということがない。いろいろな問題を、皆さん、お持ちですよ、家庭的にもいろいろ。けれども、いいですよ、何があってもだいじょうぶです、ご心配ご無用。

「わがうちなるキリストを見よ。キリストは一切を支配していたもう」

と。罪に支配されず、死にも支配されない。キリストの中に入っていますから。こんなありがたい、こんな楽なことはいしですよ。

●天下一品

皆さんも一人一人、天下一品になってください。本当は、人格というものはそういうも



のなんだ。比較を絶したもののなんです。あなた方一人一人は世界に一人しかない。絶対に特殊的な存在ですから。そのかわり、神・キリストに直結していなければだめですよ。「さあ、直結できるか？」なんて、何も心配はいらない。キリストの方から直結してくださるからキリストが

「お前を捨てない」

と仰つたら、こちらの状態に関係ない。それはもう平伏して、

「ありがとうございます」

の他に言いようがない。どういうようにすればお前を捨てないのかと、そんな条件的なこととは仰らない。無条件です。「愛する」とは無条件にその人を救うこと、助けることです。

「敵をも愛せよ」

とキリストは言われた。敵も何もありません。天下無敵という。世界中のどの人でもみな兄弟姉妹だと。それだけの霊的な迫力をもたなければ、つまらないですよ。

「どう取り扱われようと、どう言われようと、一向差し支えありません。私の中のキリストが見えませんか」

と、それだけの話です。

「人間小池は躓いたり、転んだりします。そんなものを見て何になるか。わがうちなるキリストが見えないか」

と、そういうはなしです。あなた方一人一人もそうです。そうしたら、楽になるよ。楽で、楽しくて、ありがたくて、しょうがない。そういう、しょうがない人間なんだ。

宗教改革のマルティン・ルッターが驚いているだろう、東洋にだいぶ違ったやつが現れているなど。そういう意味で突き抜けた存在はアッシジのフランチェスコです。あの人は素晴らしい。ダンテもフランチェスコには参つたろうね。本当に彼は神の人だね。彼にはローマ法王も参つてしまった。

まだ私も、やるいろいろなある。けれども、それは楽しい。戦いだから。霊的な、魂の真理の戦いだから。

¹⁴然るに^{しか}アダムよりモーセに至るまで、アダム^{とが}の咎と等しき罪を犯さぬ者の上にも死は王たりき。アダムは来らんとする者の型なり。

「アダムは来らんとする者の型なり」

とは、キリストの型だということ。「恩恵^{めぐみ}」と「賜物^{たまもの}」とはちよつとちがう。恩恵というのはキリストの生命、キリストの言葉の真理、これはみな恩恵の内容です。イエス・キリストが恩恵の主体です。恩恵は「カリス」といい、賜物は「カリスマ」(単数)または「カリスマータ」(複数)という。

¹⁵然れど^さ恩恵^{めぐみ}の賜物^{たまもの}は、かの咎の如きにあらず

この場合の「恩恵の賜物」という言い方はちよつとおかしい。これは恩恵という賜物とい



うことです。

一人の咎によりて多くの人の死にたらんには、

死が来たのは、アダム・イブの神さまに対する不信、不従順から来た。アダム・イブは神話的存在だけれども、神話的な表現でもって人間の普遍的なことを言っているわけです。

「これは神話だから、あてにならない」

なんて、バカにするわけにはいかない。神話の形をもつて人間の現実の真理をちゃんと語っているわけです。神話の表現をもつて現実の真理を語っている。おとぎばなしでもそうです。お伽話の形をもつて非常に大事なことが語られているわけです。イソップ物語でもアンデルセンの童話でもそうです。

況^{まじ}て神の恩恵と一人の人イエス・キリストによる恩恵の賜物とは、多くの人に溢れざらんや。

この場合は、「恩恵という賜物」ということです。本当は「恩恵と賜物」という言い方ができるわけです。イエス・キリストは無限の内容をもっているから、それは溢れる。もちろん、恩恵から派生してくるところの賜物という意味もあります。我々は宗教的な内容の本を書いたり、音楽を作ったり、何でもいいですが、それはみな恩恵からやってくるころの賜物の表現です。歌を作ろうが、文章を書こうが、絵を描こうが、彫刻をしようが、賜物の表現はいろいろです。人によつて様々です。キリストがあると、それでもつてその人が何かひとつの限定したものになるかという、そうではない。キリストの世界は無限定です。普通の人はみなそれを誤解しているね。

「ああ、あれはクリスチャンか。それでは…」

なんて。また、そういう偏狭なクリスチャンもいるから困るんだけどさ。

●キリストは無限

キリストは、

「自分は何もできない。何も言えない」

と言った。神さまという無限無量をキリストは受けとっているから、「何もできない何も言えない」人が、何でも言えるし、何でもできるんです。

「我何^{ごと}ことを為し能わ^ず」

というのは、為し能わざる人が何^{ごと}でもやってしまう。「何^{ごと}でも」と言つても、もちろん、善きことですけれども。悪いことをするわけではない。言葉に捕らわれてはだめです。言葉の内容を弾力性をもつて受けとつていかなければね。

キリスト自身が恩恵そのものです。福音書を読んで――キリストのなさっていること、おっしゃっていること、これは全部、恵みそのものだ――福音書が楽しくてしょうがなくならなければだめですよ。福音書を読んでいると、力がきて、光がきて、生命がきて、圧



倒されます。圧倒されて読む。分かる分らないではない。

16 又この賜物は罪を犯しし一人により来れるものの如きにあらず、

即ち、アダム・イブの、神さまに逆らった――言うことをきかなかった――ことからくるようなものではなくて、

審判は一人よりして罪を定むるに至りしが、

審判はこのようなアダム・イブのところからやつてきたけれども、

恩恵の賜物は多くの咎よりして義とするに至るなり。

これは妙な言葉だね。キリストの贖罪、十字架の贖罪が多くの人を義とするという。キリストの罪の贖いを受けとることによって、我々は義とされる。

「義」という言葉は聖書の中心的な言葉の一つです。神さまの御意にそっていることが「義」です。キリストを受けとると、受けとっている者は義人なんです。

「義人なし一人だになし」

とパウロが言った。生まれつきの義人というのは一人もいない。ただ、キリストを受けるといふと、その人はみな義人である。マルティン・ルッターもハッキリ言ってます。あなた方一人一人が本当にキリストを受けとっているなら、これを「義人」といふんです。その人が相対的にただしいのただしくないのということではない。

17 もし一人の咎のために一人によりて死は王となりたらんには、況て恩恵と

義の賜物とを豊かに受くる者は一人のイエス・キリストにより生命に在りて

王たらざらんや。

キリストを受けとったところから生ずるところの、善き行い、善き思い、善き仕事、それがみな賜物です。ということは、その賜物はキリストの栄光を現しているんです。我々の為すことすることがみな、キリストの栄光をあらわしている。それが、本当の賜物を使っている意味なんです。キリストの生命にあつていろいろなものを支配する。とらわれない。運命環境を支配していく。「王」というのは「支配する」ことです。それに従属しないことです。

●十字架と聖霊

18 されば一つの咎によりて罪を定むることの凡ての人に及びごとく、一つの正しき行為によりて義とせられ、生命を得るに至ることも凡ての人に及び

り。
これはキリストを中心にしてものを言っている。キリストが神の意志を行じていたのが「正しき行為」といふんです。正しき在り方、本当の在り方と言ってもいい。キリストのようないつの本當の在り方によって

「義とせられ、生命を得るに至ることも凡ての人に及び」



と。キリストが本当の永遠の生命をもっていた。それは神さまの意志を行じていたから。「何ごとも為しあたまわす」という彼は一切のことをした。

しかも、キリストはルカ伝12章で、

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何を
か望まん。されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまで
は思い逼ること如何許ぞや。」(ルカ12・49～50)

と仰った。聖霊の火を投ずるために来たんです。「受くべきバプテスマ」とは十字架のことです。

「十字架でもって贖罪をやってから、それから今度は復活して聖霊を与えることに
するぞ」

ということですよ。我々に聖霊を与えるためには、十字架の贖罪がなければだめだった。キリストはハッキリそれを自覚しておられた。だから、

「十字架の贖罪を受けとれ。それから今度は、祈って待っている、そうしたら、聖
霊が臨むぞ」

と。ペンテコステです。みな祈って待っていたら、火の如きものが舌のように現れて、分かれて各人の上にとどまったという。

だから、霊的な火が止まるのを霊止ひとどまるという。霊の火がとどまる。

「この火燃えたらんには……。聖霊の火が燃えたら、もう何も他にいらぬ。それ
で大丈夫だよ」

と。自分の信仰なんて、そんなことは考えていない。

「私は信仰なんかありません。聖霊の火が灯っているから、その他にいません」

とハッキリ言う。本当の真理は二段構えではないですよ。一段、一つ。中心は一つです。十字架という中心。それから、必ずその中心と同じ同心円みたいに聖霊がある。十字架と聖霊は離してはだめです。これは不可離の関係です。「聖霊、聖霊」とばかり言っているのもだめ。「十字架、十字架」と言っているのもだめ。十字架と聖霊は離すことができません。

●あるべき現実を現在のに

昔の無教会は十字架信仰、罪の赦しの信仰でした。罪が赦されたという、ただそんな消極的なことではない。驚くべき力のその生命、どんなことがあっても屈しないところの生命力、これは霊ですから。神の霊、キリストの霊が止まとどまっている。これを誰も奪うことはできません。

「運命環境、人の批評、評価、どうしても結構です。何と言われようと、何と扱われようと、結構でございます。楽でしようがない、あり難くてしようがない」

と。私は本当にそうですよ。



世の中には、牧師さんがご無理ごもつともなことを言っているものだから、

「ああそうか、もうキリスト教はごめんだ」

なんて言っつてね、やめてしまう。牧師さんたちが本当の世界をもつてものを言わないものだから、嫌になつてしまうんだ。教会に行つても、あきてしまう。

私は同じことを言つても、あなた方はあきないでしょ。それは飽きないわけなんだ。私は何回同じことを言おうとも、言うたびに常に新しい。常に力が来ているから。何か覚えてものを言っているのではないから。与えられながら語つて告白している。あなた方に教えているのではない。告白している。「教える」という言葉はいやな言葉だね。私は「教師」というのは嫌いだ。「学徒」、学ぶ者です。あなた方と一緒に学んでいる。

19それは一人の不従順によりて多くの人の罪人つみびととせられし如く、一人の従順によりて多くの人、義人とせらるるなり。

「二人の従順によりて多くの人、義人とせらるるなり」

とは素晴らしい言葉だね。「一人の従順」とはキリストですよ。喜んで神さまに絶対に服従していた。このキリストを受けとると、その人は義人になる。

「生まれつきの義人は一人だになし」

という。ところが、イエス・キリストを受けとると、誰でもが義人なんです。神の御意に従うことがうれしくなる。そういうのが義人なんです。いわゆる相対的な正しいの正しくないのということではない。パウロの言葉の奥を私は読んでいるんだからね。パウロがあまり理屈っぽいことを言っていると、「パウロさん、もういいよ、分かっているよ」と言つてやる(笑)。

20律法の来りきたしは咎とがの増さんためなり。然れど罪の増すところには恩恵もいや増せり。

全くそのとおりです。律法というものがあると、それで、律法にむしろ逆らう者がたくさん出てくる。律法はかえつて我々に、律法に逆らうことを刺激するんです。先生は生徒に「こうしろ。こうしてはいけない」と言つてはだめなんだ。

「お前たちは、こうするねえ」

と言つた方がいい。そうすると、やってない者は

「これは悪かつた。私はしなければならぬ」

となる。命令、禁止はだめなんだ。あるべき現実を現在的に言つてやる。

「お前はよく勉強しているねえ」

と。勉強してないと、

「これは悪いな。先生がそう信じてくれるなら、私は勉強しなければ」
となる。「勉強しろ」ではだめなんだ。

「勉強は楽しいねえ」



と言ってやる。そうすると、「そうか、楽しいものか」と。何でも、楽しくならなければ本ものではないですよ。何ごとをしても、楽しくならなければ本ものではない。歌をうたっているようなものだ。(中山晋平の詩を朗読。割愛)

●永遠の生命

²¹これ罪の死によりて王たりし如く、恩恵も義によりて王となり、我らの主

イエス・キリストに由りて永遠の生命に至らん為なり。

「永遠の生命」は、キリストを受けると、その時からもう来ているんです。あなた方一人一人が永遠の生命をもっている。いわゆる相対的な死はあつたつて、そんなものはもう死でなくなってしまう。死を超越している。いわゆる相対的な生死の問題はもう超越してしまっているわけです。乗り越えてしまっている。いくつまで生きるの生きないのと、そんなことはもう問題でなくなってしまう。明日死んでも、今晚死んでも、アーメン・ハレルヤです。永遠の生命が来ているんだから。

我々、キリストをいただいている者は相対的な生死の世界を超越した永遠の生命の中にハッキリある。そういう生命力を、どうぞ、ハッキリもってくださいよ。それは力がくるから。本当のエネルギーの基はキリスト自身ですからね。キリストぬきでもつて、やれ、薬を飲んだり、おいしいものを食べたり、そんなことではない。

だから、キリストの中に祈り入ることなんです。キリストと、一つになることです。そういう冥想をしますか。これはもう、異言が出てきたり、身体全体が震えたりする。祈りというのはそういう世界です。何かお願いすることではない。キリストと一つになることが、これが本当の祈りなんです。祈入する。それから何か、具体的にお願いすることがあつたら、いくらでもお願いしてください。その前に、キリストと一つになればだめです。いわゆるお願いばかりやっていたんでは。大事なのはキリストと一つになることです。

●しょうがない世界のひと

パウロというのはそういう現実にしたから、あんなエネルギーが出ている。パウロはキリストの直弟子ではない。彼はもともとキリストを知らない。復活のキリストにでつくわしただけなんだ。ダマスコ途上で復活のキリストにでつくわして、ぶっ倒れた。アナニヤに按手されて、目が覚めた。そういう男ですから。もともとキリストを信ずる者を迫害してたんだ。それが完全にひっくり返された。

「いや、イエス・キリストは大変なひとだ。参りました！」

と、降参した。降参すると、その世界に入れる。分かる分らないではない。

「参りました！」

と言って、キリストに降参すると、圧倒されると、そうするとキリストの力が入ってくる。



本当の霊の止まる^{とど}靈止^{ひと}になる。いわゆる人間、「人の間」ではない。

とにかく、楽しくてしょうがない、力が来てしょうがない、あり難くてしょうがない。そういうしょうがない世界のひとになってください。そうでなければ、つまらないですよ。

「私の信仰はこうです」

なんて、何を言っているか。私は

「信仰なんかないぞ」

と言っている。

「あなたの信仰はどうですか」

「信仰なんかないぞ」

「へえー、そうですか。あなたはクリスチャンではないのですか」

「そこらのクリスチャンとは違うんだ。信仰^いなんかありません、神交^いならあります」

とハッキリ言っている。

あなた方、この私の告白を聞いて楽しいですか。楽しくなかったらだめですよ。

「先生はひとりでいいこと言っているけれども……」

なんて、そうではない。あなた方の気持ちを代表して言っているだけです。

